

# AQUA

ここは富水 すぐ美術館の新しい活動の場  
も尽きない希望が湧いてくる  
アートも派めどいもの「AQUA」が誕生する  
水はわたしたちになくてはならないもの

2012年8月発行 28号 すどう美術館  
〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内 373  
TEL.0465-36-0740 FAX.0465-36-0739  
info@sudoh-art.com  
http://www.sudoh-art.com

## 2012 ART Santa Fe - 断想 -

ノモトヒロシ

## 芸術と行政

先ほど産経新聞社（大阪本社）編集部の大谷記者から突然電話による取材を受けた。内容はイタリア南部の近郷、カソリアの町で政府の「文化切り捨て」に対する過激な抗議活動が行なわれ、所蔵作品を一点ずつ燃やしていった。それについてどう思うかという前で、二〇〇五年に今は館長になっているマンフレディさんから、このカソリアで現代美術館を作るので、協力願いたいとの要請があり、日本から私の関係の画家五人を推薦し、作品を寄贈した。また彫刻家一人を現地に送り、三週間制作して作った作品も寄贈してきている。そのことを知っての取材でもあったらいい。その当時の話では世界で活躍する現代美術の作家から作品を提供してもらい、それを収蔵し展示する美術館を作るというユニークな発想であり、多くの新設美術館が高いお金をかけ、ピカソだ、ゴッホだ、物故の有名な画家の、それも二流に近い作品を集めて故のに比べ、ずっと意義のある美術館になるかと感心していたものである。寄贈後、二十八力国百人のアーティストと関わったキュレーターに招待状が届き、私も招待を受け、三人の画家夫婦たちとカソリアに行き、収蔵された作品を美術館で見、そこでのオープニングパーティに参加したり、ナポリの町の見学などさせて

すどう美術館館長 須藤 一郎

7月10日、チェックイン前、成田空港にあるTUTAYA書店で、私は一冊の文庫本を手にした。「どうして、僕はこんなところに」ブレース・チャトウィンの本だった。まさに、今の自分の気持ちそのもの。この紀行作家の旅の収穫を語る本は、これから自分が体験することを予感させるものかもしれないと思った。

に、長時間の移動の疲れは癒された。中心部にある展示会場はそんな街並みにあり、周囲にもアート（オブジェや壁画）があふれている。展示は、高橋さんのプランに添って7人の作品が絶妙に配置され、サンタフェの街の空気のように静謐な空間へと仕上がっていった。本当に美しくかつた。多くの来観者からも、とても好評を得ることができた。英語が全くダメな私は、すっかり朝比奈さん、宮塚さんに通訳をお願いし助けていただき、やっと会話することができた。そんな中、自分の作品の前で佇み対話し続けると、意外と制作中、見ているようで見えない部分があることに気づく。こうして、別の空間で他者の目で眺めてみると、次への可能性が潜んでいることを知らされるようだ。もっと金属という素材と触れなければ、もっと皮膚として捉えなければ、もっと、見る人の思いを、この作品の中に注ぎ込めるほどの深い器になればと感じた。

今回のサンタフェは濃密な旅だった。本当に、皆さんに感謝したい。

ものを作るとき、五感を震わせて、自分に問かけ、素材と言葉のやりとりをしながら言葉にならない想いへ飛躍したいと願ひ、足したり引いたり、その境界で悩む。そして、「エイツ」とスピードを速めて体を移動させると新しい領域が見えてきたりもする。

いつも新しい何かを目標にすること、見えぬ先へ、自分以外のものへ耳を澄ませること、それを感じることで、そして、くり返し実験することだ。今回の作品もそうして生まれてきた。旅に出ることも同じかもしれない。緊張と解放をくり返し体験させてくれる。

サンタフェに着き、澄んだ空気と丸みのあるレンガ色の建物

もらっている。そして、その後も何回か、このような形で収蔵を重ねていると聞いていた。さすが、文化の進んだ国、そして町だと思つていたのに今回の話に「イタリアお前もか」と衝撃を受けた。もちろん、「芸術は永遠」などではなく、人間に寿命があるように、美術品であっても、思いがけない事故で燃えてしまったり、朽ちてしまうことがあると私は思っている。しかし、画家が命を削って制作した作品を事情はともあれ、人為的に燃やすというのは承服しがたいことであり、何かほかの抵抗手段があるのではないのか。行政はどんなに財政が厳しい折であっても、もっと芸術の大事さと真剣に取り組みべきではないか、何とかうまい解決がされて欲しいと、そんな感想を伝えた。大谷記者の話では大阪市の橋下市長が文化事業の削減、全面見直し打ち出していること、危機感を持つての取材であったようである。だが、大阪だけでなく、日本はどこの公共団体の美術館でも、今は予算が無く、美術館でありながら、必要な作品の購入もできず、善意の寄贈に頼っているというお粗末な現状であり、私はそのことを憂えているのである。

### 点描

### こんな話でよかったら (15) 仙仁司

「コドモノクニ」(東京社、1921~44、全287冊)を御存知ですか？ そんな変な国は知らないよとおっしゃる方は是非一度お訪ねください。知らないままにしておく後悔しますよ。近代化という意識が社会に取り込まれるようになって文学も美術もアカデミーから切り離されて自由に表現されるようになった大正ロマンの時代に目覚めた大人達が本気になったのが「コドモノクニ」なのです。

その編集の中心にいた鷹見久太郎は東京社の前身の近事画報社で国木田独歩と出会って以来、多くの文化人と知己になり雑誌を作った。現代に活躍している若い人々を積極的に登用していたが、「コドモノクニ」にも多くの若い可能性が関わった。

その一人、東京帝国大学で哲学を研究し児童教育に強い関心を寄せていた倉橋惣三を編集顧問に据え、童画家岡本帰一、清水良雄、武井武雄、詩人野口雨情、北原白秋、西条八十、音楽家中山晋平など多様な意識と眼を捉えている。武井はデザインを担当し、新しい時代の絵本にふさわしいイメージのタイプフェイスを創り上げて旗手となり、多くの画家達は普段の制作からは想像もできないような斬新な童画世界を大胆に描き出した。詩人達は子供の中にとび込んで言葉を見つけ出し、音楽家は子供達の呼吸域を考えて曲作りをして空に流し、時代の空気をモダンにした。

当時、画家にとっても詩人にとっても童画や童謡は決して本業とは言いたくない面ではあったが、作家間の葛藤の中で、若い感性を向け放つて活動するうちにそれぞれの童画界、童謡界を築いてしまった。

(コドモノクニ展 ~9月2日まで 多摩美術大学美術館 TEL042-357-1251)

### 白いノート 8

肌で感じる  
サンタフェのアートフェアの仕事で、7月10日から一週間、久しぶりに渡航した。海外へ行くといろいろな刺激を受けることができて、  
今回印象に残ったことのひとつは、現地のコンテンポラリーのギャラリーだった。街の中心から少し離れた場所に何軒かのギャラリーが建っている。倉庫のように大きな建物で、入ってみると天井が高く、広くすっきりとしたスペースにゆつたりと作品が展示されている。ふと見ると、8mほどの壁一面に展示された大きな作品に赤丸がついている。この規模のスペースを維持していくだけの顧客を持つていけることであろう。どのギャラリーも感じよく応対してくれ、展示替え作業中の作品も早く見せてくれた。アートに対する価値観の豊かさ、スケールの大きさには圧倒された。  
日本では見られないアートシーンに出会えることは、貴重な経験となる。こうして異なる国の状況を肌で感じることで、海外での一番の醍醐味であり、それによって自分の意識をどう変えていけるかが大切だと思つている。  
高橋玉恵

みなさんはじめまして私は山北町の丹沢湖のほとりにある落合館という家族経営の小さな旅館の跡取りです。併設している蕎麦屋で昼食の提供もしております。

この度、すどう美術館のご提案により私どもの施設に、東日本げんきアートプロジェクトの作品を展示しました。私は以前から旅館で美術の展示を行っていたという夢があったので、すどうさんからの申し出は大変ありがたかったです。というのも私自身も絵を描いており、旅館という事業を継承しようという決心し、理由の一つに、旅館経営に美術が生かせるのではと考えるようになったからなのです。このような形で夢の第一歩を踏み出したことに大変感謝しています。

今回の展示で書きたいと気づいたことについて少し書きたいと思います。ひとつに、現代美術の作品が旅館や蕎麦屋といった空間におどろくほどよくなじんだということです。これまで美術作品の展示がしたいと思いつつ踏み込めなかった理由の一つとして現代美術の作品はギャラリーのような特別なスペースを設けなければできない

という思い込みがあったからです。工夫次第でいろいろな所に作品がおけるということに気付かせてもらったことは私にとって非常に大きなことです。次に作品を壁に掛けるときの楽しさを実感したことです。私は搬入の少し前からわくわくとして、店内の整頓をしたり、壁を白いペンキで塗ったりしながら久々に「いきてるなあ」と思いました。また搬入のときは副館長からキョレターとしての視点や考え方など教えていただき、大変勉強になりました。

この展示を通して、多くのことを学び、気付くことができ、アートの力が人や町を元気にする可能性にあふれるということを感じることができました。そして多くの人に美術に触れ興味を持ってもらいたいと思うようになりました。この経験をふまえて、今後作家の紹介を兼ねた作品の展示を定期的に行っていくかと思っております。早速体当たり、夢の一步を踏み出しました。みなさま どうぞお出かけ下さい。

【草川誠展―形の節― 7/26(木)〜9/30(日) 丹沢湖落合館】

展覧会 info

周平展

9月4日(火)〜16日(日) 11:00〜19:00(最終日〜17:00) 月曜休館

「遊ぶ人・糸II」は、「遊ぶ人・糸」のシリーズをさらに深める作品集です。「遊ぶ」は、ある意味で自分の居場所を探し、確認する行動の一つです。それは、自分の意識の中で真実と幻惑、あるいは虚誕の世界に遊ぶということです。彼らは、自我感覚を入れ込んだ「糸」で、非現実的な空間や出鱈目な落とし穴や、複雑な結びなどを創ったり、分解したり遊びの中で新たな可能性、新しい存在する形を発見したいと思いました。周平

諸貫きよ恵展

【第14回若き画家たちからのメッセージ受賞展】

9月18日(火)〜30日(日) 11:00〜19:00(最終日〜17:00) 月曜休館

鉄で野菜を作っています。野菜の形に心惹かれるからです。たかが野菜、されど野菜。かぼちゃのぎゅつと詰まった形、トマトのぱんつと張った形、エリンギのなめらかな曲線、それらの当たり前前の形態は、キリンの首が長いように、説得力があり、そして存在感があります。何日もかけて鉄を叩くだけの魅力があります。ただただ、夢中でその形態を追う事で、野菜の寡黙な存在感を表現できれば、と思っています。諸貫きよ恵

松永記念館特別展

「井上三綱―入生田のアトリエから―」

(小田原市生涯学習課長 古矢智子)

「すどう美術館」の建物は、かつて画家・徳沢隆枝さんの住まい兼アトリエでした。その徳沢さんの師匠に当たるのが、井上三綱(いのうえ・さんこう)です。坂本繁二郎を生涯の師として仰ぎながらも、様々な技法を組み合わせ、古色を帯びた壁画をも連想させる独特の画風を確立した三綱は、物理学者オッペンハイマーから「あなたの絵には時間が出ている」と絶賛されました。

三綱が小田原の入生田にアトリエを構えてから60年にあたる今年、ご遺族から作品を寄贈された小田原市で受贈記念特別展が開催されます。ぜひお出かけください。

会期：平成24年8月4日(土)〜9月17日(祝・月)

会場：松永記念館(箱根登山鉄道箱根板橋駅下車徒歩10分)

料金：500円

問合：小田原市郷土文化館 電話0465-23-1377



続々 続々

世界一小さい美術館ものがたり

すどう美術館での営創吉展

去る6月19日から7月1日まで、すどう美術館において「営創吉展」(営創吉1905-1982)を開催した。小田原に拠点を移し、ちょうど丸5年になること、そして何よりも営創吉の作品に出会い「壺中」という作品を購入したのが今から30年前であり、それが美術館をはじめ30年の記念展にもなったのである。作品は油彩、デッサン、オブジェ、立体の計30点余りを展示した。思い立ったが吉日の期間で、美術館ニュースの「AQUA」27号でお知らせした程度であったが、幸い、朝日、読売の両新聞から取材があり、それぞれの新聞で紹介されたこと、また、地元から新聞でも取り上げてくれたことなどから予想を超える大きな反響があった。初めて営創吉に接した人々の多くが感動を覚えてくださり、長い時間作品の前から離れてくれないでいた。今からもう14年前、町田の自宅での「命のつぶやきが聞こえる―営創吉展―」がNHKの日に

曜美術館で放映され、2000人を超す来館者があつたときの情景が思い出された。作品の多くが40年前に作られているが、現代に通ずる新しさを持ち、独特のマチエールに加え、ユーモアやメルヘンもあつていったのではなからうか。こんなエピソードもあつた。川越市から訪れた方は過日、古本屋で本を見てみると後光の射している画集があり、それが営創吉のものであつたという。早速入手し、作家のことを調べているうち、すどう美術館で偶然にも営創吉展開催中を知り、飛んできたとのことであつた。実物と感激の対面をしてくれたのである。30年前、わけも分からず、どうしても欲しくなつて買ってしまつた営作品、その営作品がこんなに人の心の中に入り込んでいくことをあらためてうれしく思った。

須藤一郎

編集後記

夏になると外国在住のアーティスト達がよく帰国する。「年に一度ですが、すどう美術館に来るのが楽しみです」と訪ねてきてくれる。居合わせた人たちが一緒に楽しいひと時を過ごします。今年もイタリア在住の松山さんが庭からスーと現れた。まるで隣町からやってきたように。イタリアの人達の家族や友人とのかわり方、政治経済、美術環境などを聞いて、うちを聞いて、うちを聞いて、本は何か変な国になつていくと、つくづく思つた。日本人はいつだってどこに向かっているのか。

須藤紀子